

『瑜伽師地論』菩薩地における經典觀

1. 問題の所在

周知のように『解深密經』はいわゆる三時教判を説き、自らの立場を第三の轉法輪と位置づける。それは釈尊の真意、隠された意図を明らかにしたという自負の表明であり、經典名 *saṃdhinirmocana* にそれが端的に示されている。そして、自らの立場は空性を説いた般若經を超えているとする。なぜこのような立場が強調されたのであろうか。その因由を探究することは瑜伽行派の經典觀を知る基本であろう。

さて、『解深密經』に先行し、しかも決定的な影響を与えたのは『瑜伽師地論』声聞地と菩薩地であったと思われる。声聞地の瑜伽行の方法は『解深密經』に直接の影響を与えており、菩薩地は空性の觀念を瑜伽行派に取り込み理論化する先駆的な思想を提示している。

ここでは瑜伽行派における聖教の位置づけを確認し、菩薩地が經典に依拠して思想を展開するあり方を検討する。菩薩地が阿含經典に依拠しつつ、般若經を思想の基盤に据え、しかも龍樹を意識しつつ空性思想を展開しているが、その地平を突破して『解深密經』において独自の經典制作をした論理的必然性とそこに見られる宗教的意義を考察する。

2. 空性相応經典について

聖教は権威をもち、しかも自らの体験に則して解釈される。そのような聖教への態度は『瑜伽師地論』本地分に明確に説かれる。そして阿含經典における縁起を説き、空性相応 *śūnyatāpratisamyukta* である如来の教え *tathāgatabhāṣita* を権威あるものと受けとめ、教えに則した体験を求める。このような態度は声聞地と菩薩地に共通している。

しかし、他方で菩薩地には空性相応經典を大乘相応 *mahāyānapratisamyukta* とする表現も見られる。しかも經典に秘められた特別な意図 *ābhīprāyikārtha* を解釈する場合に、釈尊の教説が仮説 *prjñapti* であることとその背後に認めるべき真実 *tattva* についての緊密な関連を無視する立場が批判される。これは般若經をめぐる解釈と想定できる。しかし、菩薩地は直接的に般若經(『二万五千頌般若經』?)を引用することなく、阿含經典にもとづき自らの空性思想を根拠づけようとする。ここには龍樹の空性解釈への対抗意識が見られるのであろうか?

3. 空性理解と經典のありかた

般若經に説かれる空性思想を龍樹と異なる地平から正統に解釈する要求が瑜伽行派にあったと想定する。それは般若經が堅持する縁起の典型を十二縁起に見るアビダルミックな立場への回帰とも考えられないか。そうであるとすれば、アビダルマ的に仏陀の意図を再解釈する地平が求められる。それゆえ「論」にもとづき瑜伽体験が解釈され、その解釈にもとづき、新たに「經」が生み出される必然性があったといえよう。それはゆるがせにできない宗教的権威を体験と知によって再構成するという瑜伽行派の立場の確立でもあった。それは大乘經典に見られる仏陀の超越的救済の力に依存する宗教性を脆弱にする危険があったのではなかろうか。

キーワード 空性相応經典、大乘相応、甚深密意、